

「日本語レキシコン」共同研究発表会(複合動詞特集)(東北大学)

2012年9月24日

# 語彙的アスペクト動詞としての 「～倒す」について

-「～果てる」や「～まくる」との比較において-

長谷部 郁子

(筑波大学非常勤講師)

ikukolcs@yahoo.co.jp

# 導入

- (1) a. 秋葉原で遊び倒す。 V1 + 倒す 反復強調  
b. 子孫が死に果てる。 V1 + 果てる 完遂  
c. 秋葉原で遊びまくる。 V1 + まくる 反復

- 影山(1993)における分類:

(1a, b) **語彙的**複合動詞 (1c) **統語的**複合動詞

← さらなる分類の必要性(「込む」「回る」のような多くの種類のV1と共起するV2の存在(影山(1993))、「打ち上げる/上がる」などの自他交替の問題(cf. 影山(1996))など。由本(2005)も参照)

# 問題の所在 (cf. 影山 (2012))

- 一部の語彙的複合動詞のV2の意味の希薄化
  - (2) a. 木を切り倒す。 / 木を倒す。  
b. 渋谷で遊び倒す。 / \*渋谷で倒す。
  - (3) 国が荒れ果てる。 / \*国が果てる。  
(cf. 会議が果てる)
- 語彙的緊密性の低い語彙的複合動詞の存在
  - (4) a. \*木を切りに切り倒した。  
b. 渋谷で遊びに遊び倒した。  
c. 私は困りに困り果てた。

# 本発表での主張

- 「切り倒す」が純粹な語彙的複合動詞であるのに対し、「遊び倒す」や「困り果てる」は語彙的アスペクト複合動詞である。
- 語彙的アスペクト複合動詞のV2は、L(exical)-Asp(語彙的アスペクト(影山(2012)))を表す補助動詞であり、統語上では $V_{L-Asp}$ に生起する。
- 語彙的機能範疇 $V_{L-Asp}$ に現れる要素は語彙概念構造(LCS)表示(影山(1996))において、V1のLCS内のなんらかの事象を取り立てる。

# 本発表での主張(その2)

- 「まくる」は統語的複合動詞を形成する補助動詞であり、統語上では機能範疇H(igh)-Asp (Fukuda(印刷中))に生起する。
- 複合動詞のV2はH-Asp、L(ow)-Asp (Fukuda(印刷中))、 $V_{L-Asp}$ 、Vという複数の位置に生起する。
- $V_{L-Asp}$  とVはLCS表示と密接な関わりを持つが、H-AspとL(ow)-Asp はLCS表示からは独立している。

# 本発表の構成

- 「～倒す」、「～果てる」、「～まくる」の観察
- 「アスペクト」の定義
- 複合動詞のV2の統語上での生起位置
- 語彙的アスペクト動詞のLCS取り立て
- 統語上で複数の位置に生起しうるV2の観察
- 理論的帰結、英語との比較、動詞以外の語彙的アスペクトや語彙的モダリティの存在の可能性
- 結語

# 事実観察(「～倒す」)

- 「～倒す」は動作の反復の強調を表す。  
遊び倒す、飲み倒す、読み倒す cf. 切り倒す
  - 一部を除き、V1とV2の形態的緊密性が高い。  
→ 語彙的複合動詞である。
- (5) a. \*本が多くの人に読まれ倒す。/ \*子供に本を  
読ませ倒す。
- b. \*一郎がその本を読み倒し、次郎もそうし倒し  
た。
- (4) b. 渋谷で遊びに遊び倒した。
- (6) 上司に叱られ倒す。/ 自分の子供に万引きさせ  
倒した母親が逮捕された。

# 事実観察(「～倒す」続き)

- V1の動詞制限(活動動詞のみ)

(7) a. 遊び倒す、飲み倒す、読み倒す、(カラオケで)歌い倒す、?泣き倒す、(コースを)走り倒す(cf. \*駅に走り倒す)(活動動詞)

b. \*死に倒す、\*着き倒す、\*壊れ倒す、\*焼け倒す、\*凍り倒す、\*流れ倒す(到達動詞)

c. \*壊し倒す、??焼き倒す、\*殺し倒す、\*置き倒す、\*流し倒す、\*建て倒す(達成動詞)

d. \*知り倒す、\*住み倒す、\*わかり倒す、\*居倒す、\*あり倒す(状態動詞)



# 事実観察(「～果てる」)

- 「～果てる」は完遂を表す(cf. 城田(1998))。  
死に果てる、(野原が)焼け果てる、困り果てる
  - 一部を除き、V1とV2の形態的緊密性が高い。  
→ 語彙的複合動詞である。
- (8) a. \*調査が尽くされ果てる。/\*彼を困らせ果てる。  
b. \*一郎が困り果て、次郎もそうなり果てた。
- (4) c. 私は困りに困り果てた。

# 事実観察(「～果てる」続き)

- V1の動詞制限(主に到達動詞のみ)

- (9) a. \*遊び果てる、\*飲み果てる、\*(コースを/駅に)走り果てる、\*読み果てる、\*泣き果てる(活動動詞)
- b. 死に果てる、壊れ果てる、焼け果てる、荒れ果てる、\*凍り果てる、\*着き果てる(到達動詞)
- c. \*壊し果てる、\*焼き果てる、\*殺し果てる、\*置き果てる、\*建て果てる(達成動詞)
- d. \*知り果てる、\*住み果てる、\*わかり果てる、\*居果てる、\*あり果てる(状態動詞)

# 事実観察(「～まくる」)

- 「～まくる」は反復を表す。(cf.「～倒す」)

遊びまくる、飲みまくる、読みまくる

- V1とV2の形態的緊密性が低い。

→ 統語的複合動詞である。

(10) a. 本が多くの人に読まれまくる。 / 子供に本を  
読ませまくる。

b. 一郎がその本を読みまくり、次郎もそうしま  
くった。

▪ V1の意味制限がほとんど見られない

(10) c. 遊びまくる / (多くの荷物が) 着きまくる / 壊し  
まくる / ? (文句が) ありまくる (数の解釈)

# これまでのまとめ

- 「倒す」「果てる」: 本来の語彙的な意味が希薄に。代わりに、「反復の強調」や「完遂」などの意味を新たに持つようになり、**事象の一部に言及する働き**をするようになる。
- 「まくる」も「反復」を表し**事象の一部に言及する**。
- 「倒す」「果てる」が語彙的複合動詞を形成する一方、「まくる」は統語的複合動詞を形成する。  
→ 「倒す」「果てる」:**語彙的アスペクト**  
L(exical)-Asp(影山(2012))

「まくる」:**統語的アスペクト**

語彙的複合動詞(切り倒す)/語彙的アスペクト複合動詞(遊び倒す)/統語的複合動詞(遊びまくる)

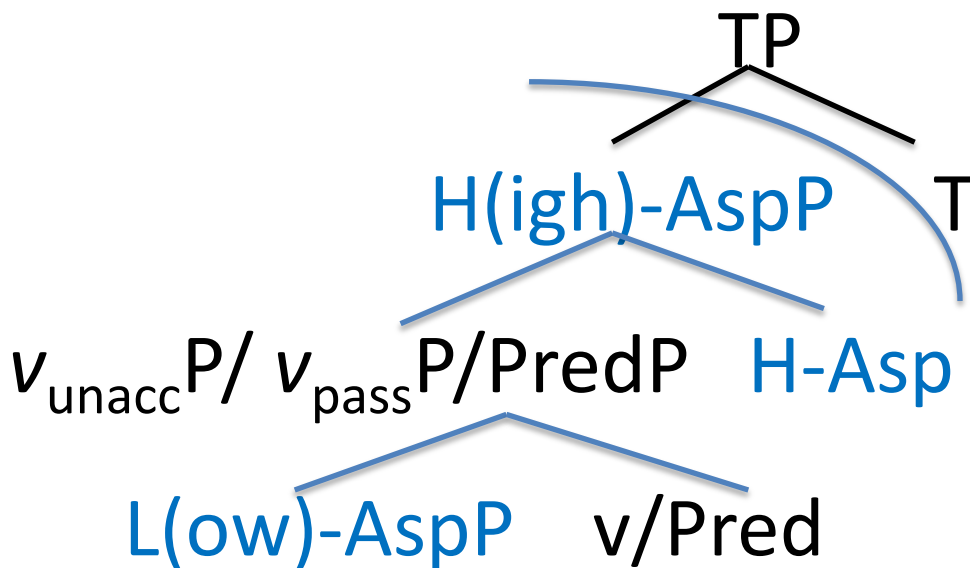
# アスペクトの定義（影山（2012））

- 「広義」のアスペクト（事象・事態の切り分け）：
  - (11) a. 開始、終了（始める、終わる、かける.....）
    - b. 継続、完了、達成、完遂（続ける、終える、果てる、果たす.....）
    - c. 超過、不成立（過ぎる、損なう、忘れる.....）
    - d. 反復、動作強調（まくる、倒す、返す.....）
    - e. 相互関係（合う、合わせる.....）
    - f. 物理的視点（あげる、回る、わたる.....）
    - g. 社会的視点（あげる、さげる、つける.....）
- 従来のアスペクト：主に(11a, b)と(11c, d)の一部

# アスペクトの統語構造

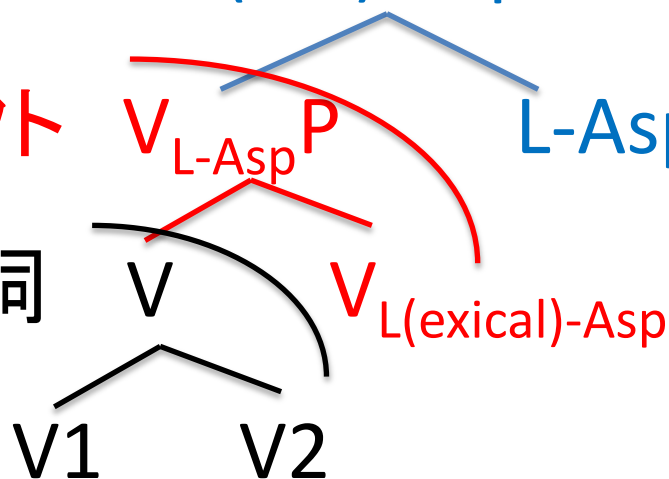
(12)

統語的アスペクト



語彙的アスペクト

語彙的複合動詞



倒す、果てる: V<sub>L-Asp</sub>

まくる: H(igh)-Asp

# (12)の構造と複合動詞

- 統語的アスペクト (Fukuda (印刷中) cf. Borer (1994))

## 統語的複合動詞のV2

H-Asp: 影山 (1993) における、非対格型補文構造 + 他動詞型補文構造の一部

(始める、終わる、かける、まくる.....)

L-Asp: 影山 (1993) における他動詞型補文構造の一部 (終わる、直す、合う、飽きる.....)

- 語彙的アスペクト (影山 (2012)) :  $V_{L-Asp}$

## 語彙的アスペクト複合動詞のV2

影山 (1993) における他動詞型補文構造の一部 + 語彙的複合動詞の一部 (倒す、果てる.....)

# (12)の構造から説明できること

- 複合動詞の種類による形態的緊密性の差

(13) a.\*木を切りに切り倒した。

b. 遊びに遊び倒した。/ 困りに困り果てた。

c. 遊びに遊びまくった。

(5) b.\*一郎がその本を読み倒し、次郎もそうし倒した。

(10) b. 一郎がその本を読みまくり、次郎もそうしまくった。

← (13)の反復構文は $V_{L-Asp}$ 以上の統語構造に適用可能だが、「そうする」置き換えは $V_{L-Asp}$ 以下の構造に適用することはできない。



# (12)から説明できること(続き)

- V1の動詞制限

$v_{unacc}$  P /  $v_{pass}$  P / PredP : 非対格 / 受動態 / 使役

PredP (長谷部 (2005), cf. Bowers (1993))

$v_{unacc}$  P /  $v_{pass}$  P / PredPより下部に出現する要素 (L-Asp、 $V_{L-Asp}$ 、V) の補部に非対格 / 受動態 / 使役は現れない。

(15) \*荷物が着き終わる。 / \*手紙が書かれ終わる。 / ??

子供に本を読ませ終わる (L-Asp) \*本が多くの  
人に読まれ倒す。 / \*子供に本を読ませ倒す。 /

\*調査が尽くされ果てる。 / \*彼を困らせ果てる。

( $V_{L-Asp}$ ) \*叩かれ壊す。 / \*叩かせ壊す。(V)

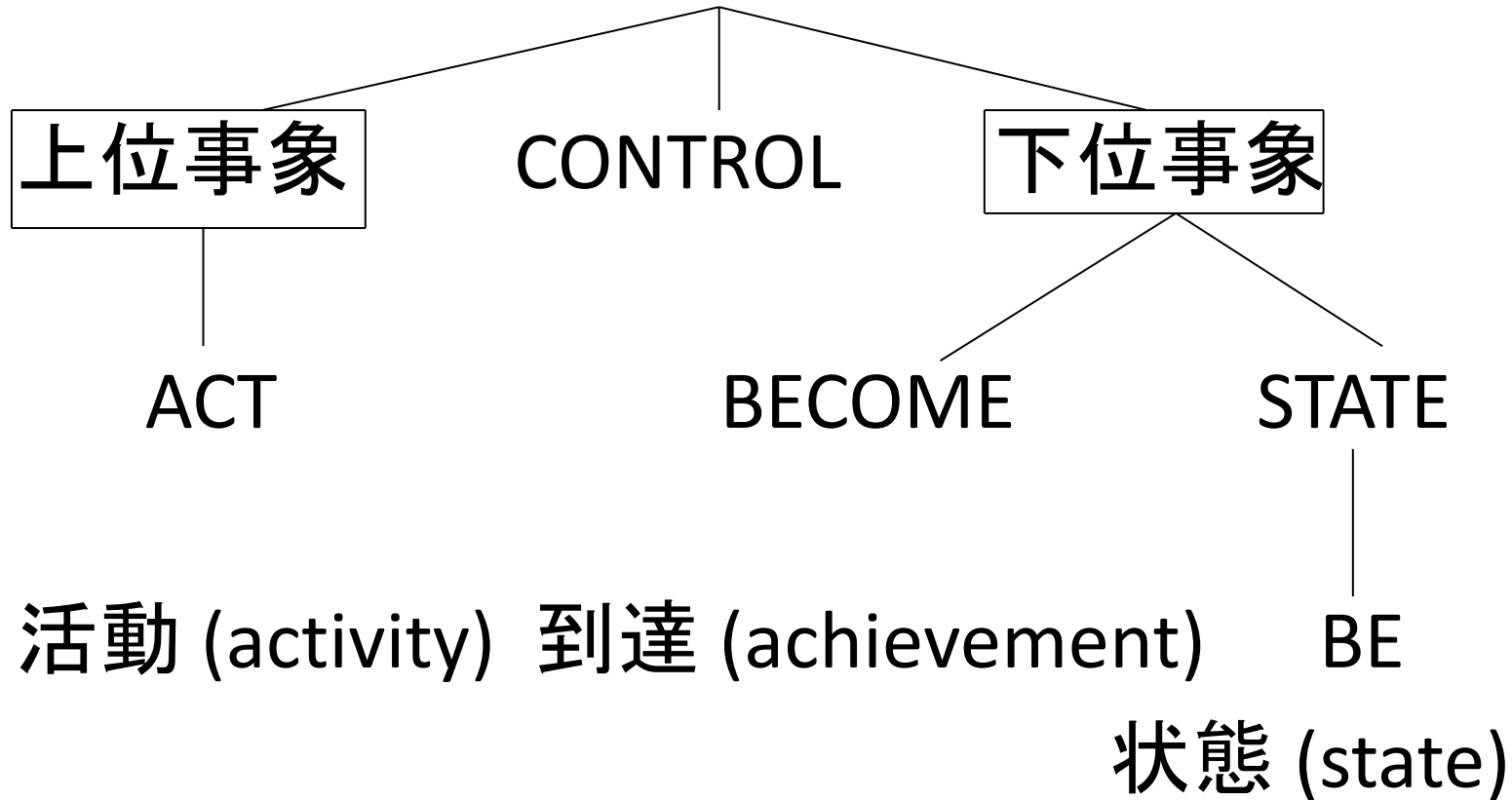
(10) a. 本が多くの人に読まれまくる。 / 子供に本を読  
ませまくる。(H-Asp)

# 反例？

- 「果てる」のV1: 到達動詞(非対格自動詞)  
死に果てる、焼け果てる、困り果てる
- ←  $V_{L-Asp}$  のV1選択(動詞の種類の選択)には**統語以外の要因**が働く。
- 語彙的複合動詞のV1選択: **項構造**が関わる。  
他動性調和の原則(影山(1993))  
切り倒す/\*切り倒れる/\*切れ倒す  
語彙的複合動詞の形成: V2の**LCS**の様態や項の  
ロットにV1を補充    LCSの補充: 影山(2002)
- 語彙的アスペクト複合動詞のV1選択:  
**V2のLCSがV1のLCS内の事象を取り立てる。**

# 使役事象 (影山 (1996))

(16) 達成 (accomplishment)



(影山 (1996: 90))

# LCSの取り立てについて

- 語彙的アスペクト複合動詞のV2のLCS(有限)

(17) 反復: [<sub>L-Asp</sub> REPEAT] 達成・完遂 [<sub>L-Asp</sub> ACHIEVE]

- (17)のLCSがV1のLCS内の事象を取り立て  
どの事象を取り立てるかは動詞により異なる。

(18) a. 倒す: [<sub>L-Asp</sub> REPEAT] [<sub>x</sub> ACT]を取り立て

b. 果てる: [<sub>L-Asp</sub> ACHIEVE [<sub>-location</sub>]

[<sub>y</sub> BECOME [<sub>y</sub> BE AT STATE]]を取り立て

(19) a. 遊ぶ・(酒を)飲む: [<sub>x</sub> ACT] 遊び倒す、飲み倒す

b. 死ぬ: [<sub>y</sub> BECOME [<sub>y</sub> BE AT STATE]]死に果てる

# LCSの取り立てが許されない場合

1. 取り立てるべき事象がV1のLCS内に存在しない。

(20) a.死ぬ: [y BECOME [y BE AT STATE]]\*死に倒す

b.ある: [y BE AT ] \*あり倒す/\*あり果てる

c.遊ぶ: [x ACT] \*遊び果てる

2. 余分な事象が存在する(長谷部(2012))。

(21) a.叩く: [x ACT ON y] #叩き倒す(反復の解釈)

b.走る: [x ACT<sub><run></sub>]/[x ACT<sub><run></sub> CAUSE [x MOVE  
TO GOAL] {コースを/\*駅に}走り倒す

(22) a. \*破れ果てる/\*凍り果てる/\*割れ果てる

b. [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT STATE]]]

反使役化(影山(1996)) 項の同定

# 取り立てが許されない場合(続き)

3. 直接取り立てる事象内に、項構造で外項となる項が存在しない(内項のみ存在する場合を除く)。

(23) 壊す : [x CONTROL [y BECOME [y BE AT BROKEN]]]

\*壊し果てる 外項:x 条件2にも違反

(24) a. 壊れ果てる/焼け果てる cf. (22a)

b. [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT STATE]]]

条件2違反、しかし条件3はOK cf. (23)

4. V2のLCS内の素性とV1のLCSの素性の不一致

(25) 果てる : [<sub>L-Asp</sub> ACHIEVE [-location]] /\*着き果てる

# 「取り立て」により説明されること

- Telicity (Tenny (1989, 2004)): 取り立てる事象の差異

(26) 堺の街を{\*完全に/\*3時間で/3時間}遊び倒した。  
/ {完全に/3時間で/\*3時間}精根が尽き果てた。

- 「倒す」と「返す」: どちらも「反復」 [<sub>L-Asp</sub> REPEAT]

(27) a. 本を読み倒す (読書の行為を何度も行う)

b. 本を読み返す (既読の部分を再び読む)

(28) 返す: (16)の使役事象全体を取り立て cf. (18a)

(29) 読む: [x ACT<sub><read></sub> y] (cf. Grimshaw (2005))/[x ACT]  
CAUSE [y BE AT READ]

(30) この本を{3時間/3時間で}読んだ。

(31) この本を{3時間/?3時間で}読み返した。 cf. (26)

# 統語的アスペクト

- H-Asp・L(ow)-Asp: LCSの取り立ては行わない。  
V1選択で役割を果たすのは**統語的な要因のみ**
- (10) c. 遊びまくる/(多くの荷物が)着きまくる/壊しまくる/?  
(文句が)ありまくる(数の解釈)(H-Asp)
- (32) 遊び終わる/\*荷物が着き終わる/壊し終わる/\*あり終  
える (L(ow)-Asp)
- 自他交替をしない: 壊れ始める/\*壊れ始まる  
「終わる/終わる」: H-Asp/L-Asp (Fukuda (印刷中))  
V<sub>L-Asp</sub>: 「打ち上がる/上げる」脱使役化 (影山 (2012))  
V: 反使役化(壊れる)、脱使役化(植わる) (影山 (1996))



# 統語的アスペクト(続き)

- H-Asp, L(ow)-Asp: 機能範疇、LCSを持たない。

cf.  $V_{L-Asp}$ : 語彙的機能範疇、LCSを持つ。

LCSの代わりに、Aspに要求される素性を持つ。

(33) 始める [+ Inchoative] まくる [+ Iterative]

一部の素性: 本動詞(「店を始める」)のLCSが抽象化

- 機能範疇に要求される素性

Asp: [+ Inchoative], [+ Completive], [+ Iterative]...

事象を何らかの意味で切り分ける

Mod(al): [+ Modal], [+ Speaker] 話者の心的態度

cf. 長谷川(2007)、長谷部(2008)

# これまでのまとめ

## (34) 統語的アスペクト

統語的複合動詞

LCSからは独立、素性

## 語彙的アスペクト

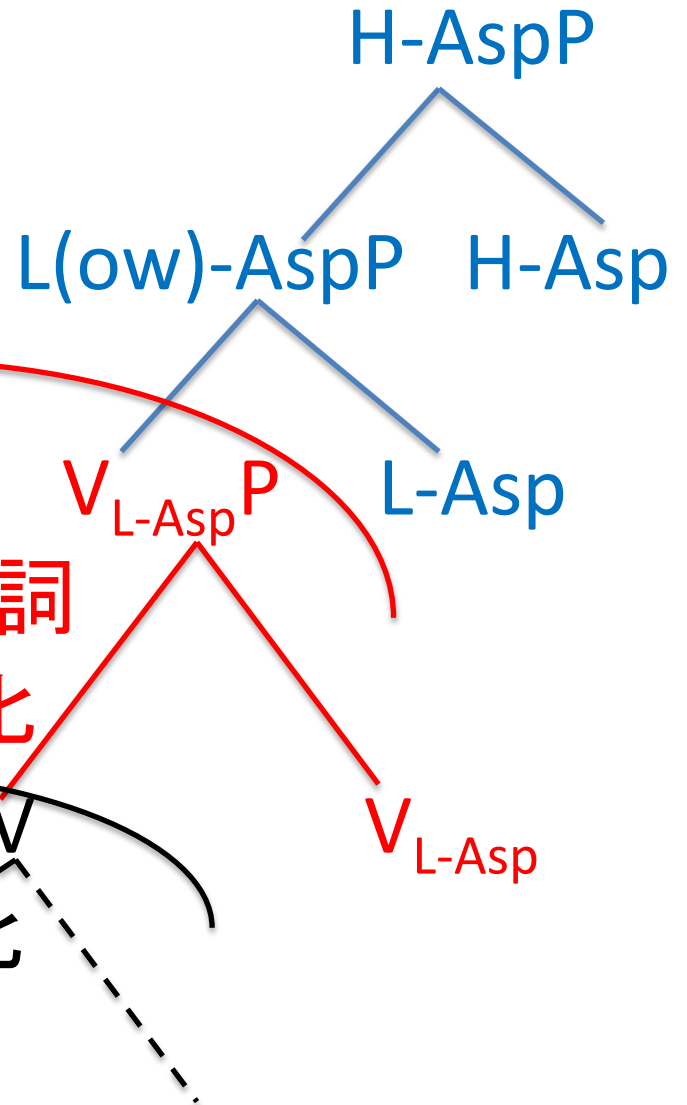
語彙的アスペクト複合動詞

LCSの取り立て、脱使役化

語彙的複合動詞

LCSの補充、脱・反使役化

他動性調和(項構造)



# 複数位置に生起するV2

- 「始める」: H-AspとL-Aspの2か所 (Fukuda (印刷中))

→ V2が複数位置に生起する可能性

- 「倒す」: 基本的には $V_{L-ASP}$

(6) 上司に叱られ倒す。 / 自分の子供に万引きさせ倒した母親が逮捕された。

→ 「倒す」はH-Aspにも出現する可能性？

- まくる、始める: どちらもH-Asp

(35) 会社の金が使われ{まくる/始める}。

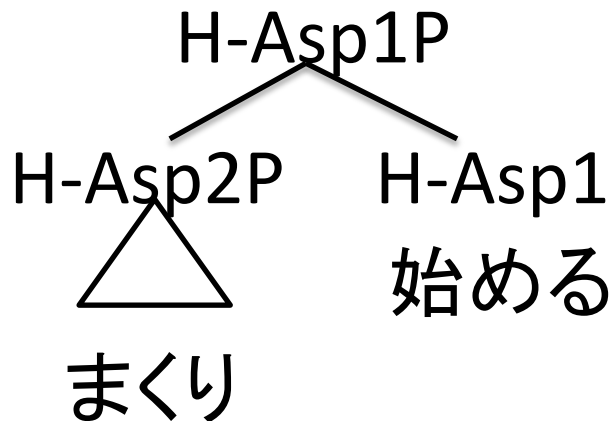
(36) a. 会社の金を使いまくり始める。反復<起動

b. 会社の金が使われまくり始める。

# 複数位置に生起するV2(続き)

- H-Aspは重複することが可能である。

(37)



(38) \*会社の金を使い始めまくる。\*起動<反復  
→ (11)に記載のアスペクトに序列が存在する。

- L(ow)-Asp以下のレベルは重複しない。

(39) ??本を書き直し直し終える/\*ほじくり返し倒す

L-Asp + L-Asp

$V_{L-Asp} + V_{L-Asp}$

(40) 本を書き直し終わる/?ほじくり返しまくる

# 複数位置に生起するV2(続き)

- 「込む」: 移動 [x MOVE TO z] (本動詞)

cf. 影山(1993), 松本(2009)

- (41) a. 駆け込む、怒鳴り込む (V、LCSの補充)

[MOVE]の様態にV1のLCSを補充

- b. 道具を使い込む ( $V_{L-Asp}$ )

動作反復: [ $L-Asp$  REPEAT] [x ACT]を取り立て

- c. 研究費を使い込む ( $V_{L-Asp}$ )

完遂: [ $L-Asp$  ACHIEVE]使役事象全体を取り立て

- 尽くす: 2つの用法 (cf. 影山(1993)、由本(2005))

- (42) a. 調査し尽くす (完遂) b. 立ち尽くす (動作強調)

- (42a): H-Asp (受身可能) (42b):  $V_{L-Asp}$

# 理論的帰結など

- (34)のようなモデルの想定：影山(1993)以来のモジュール形態論を支持し、影山(1996)で示唆されたLCSと統語(と項構造)の関係をとらえ直す。

「概念構造と統語構造は、どちらからどちらに派生が進むという関係ではなく、両者が、ちょうどコインの裏と表のように、言語の意味と形を同時に表示していると仮定する(両者の間に項構造が入る)」(影山(1996:133))

- 日英語比較：over- + Vと「過ぎる」overeat/食べ過ぎる(Hasebe (2004, 2007)) (cf. 由本 (2001, 2005))

over- + V: over-のLCSとVのLCSを**合成**

過ぎる: 「過ぎる」のLCSにV1のLCSを**補充**

← 形成方法の違いを、言語間のLCSにおける視点の指向性の違いを表す**有界性パラメータ**(Kageyama (2001))に還元 (over- + V: VP V1+「過ぎる」: VP+VP)

# 理論的帰結など(続き)

(43) over- +V:V (LCSの合成) 過ぎる: H-Asp

(44) a. \*He ate himself./✓ He overate himself.

b. \*彼は自分自身を{食べた/食べ過ぎた}。

(43a): 合成による項の出現 (43b): Vの項の継承

→ 視点の指向性とアスペクトの選択 cf. (11f, g)

• その他の語彙的アスペクトや語彙的モダリティ

(44) イラつく (2モーラの擬態語 + 「つく」): V<sub>L-Asp</sub>

つく: 擬態語のLCSを取り立て (長谷部 (2012))

本来の「付着」の意味を失う (cf. 飛び付く)

# 理論的帰結など(続き)

(45) 心細い、口煩い、手早い (非合成的複合形容詞)

(46) a. \*心が細い、\*口が煩い、#手が早い

b. 心が優しい(心優しい) 合成的複合形容詞

(45)のA:Nが示唆する心理状態や動作の強調

(11d)に相当する $A_{L-Asp}$

(45)の複合形容詞: クオリア構造 (Pustejovsky (1995))  
の情報を利用(長谷部(2007) cf. 由本・影山(2009))

(47) 走り方: 「方」が補部VのLCSを一部取り立てる。

LCSの取り立てと統語の関連(長谷部・神谷(2010))

方:  $N_{L-Asp}$  動作・程度の強調 (11d)



# 理論的帰結など(続き)

(48) 授与動詞くれる: 語彙的モダリティ  $V_{L-Mod}$

くれる:v [+ Speaker](長谷川(2007))

長谷川(2007): Mod(al)の[+ Speaker]を「くれる」が満たす。  
意味はアスペクトの(11g)(社会的視点)に近い。

(49) {私/\*彼}は悲しい。感情形容詞(長谷部(2008))

長谷部(2008): 感情形容詞は[+ Modal]を持ち、Modの[+ Modal]と照合することにより、その指定部に[+ Speaker](1人称主語)を要求するようになる。

感情形容詞:  $A_{L-Mod}$  話者の感情的な心的態度

統語的モダリティ: 「～だろう」、「～まい」(井上(2007))

# 結語

- 「～倒す」、「～果てる」、「～まくる」の統語的・意味的特性を観察し、「～倒す」と「～果てる」が、 $V_{L-Asp}$ に生起する語彙的アスペクト複合動詞であるのに対し、「～まくる」がH-Aspに生起する統語的複合動詞であると提案
- $V$ や $V_{L-Asp}$ にはLCSの補充や取り立ての操作や項構造における制約が関わるのに対し、H-AspやL-Aspにはこうした語彙レベルの制約が関わらないことを主張
- $V_{L-Asp}$ という語彙的アスペクトを表す語彙的機能範疇を想定することにより得られる理論的帰結を提示

ご静聴ありがとうございました。

# 参照文献

井上和子 (2007)「日本語のモーダルの特徴再考」長谷川信子編『日本語の主文現象』227-260. ひつじ書房/影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房/影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版/影山太郎 (2012)「複合動詞の形態構造と自他交替」、国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」における講演(於国立国語研究所)/城田俊 (1998)『日本語形態論』ひつじ書房/長谷川信子(2007)「1人称の省略:モダリティとクレル」長谷川信子編『日本語の主文現象』331-369. ひつじ書房/長谷部郁子 (2005)「日英語の非対格動詞の統語的使役化」影山太郎(編)『レキシコンフォーラム No. 1』, 103-132. ひつじ書房/長谷部郁子 (2007)「複合形容詞の意味と統語」『日本語文法学会第8回大会発表予稿集』, 194 -201./長谷部郁子 (2008)「日本語の形容詞のテンスとモダリティ」平成19~21年度 日本学術振興会 科学研究費補助金(基盤研究(B)) 研究成果報告書『文の語用的機能と統語論 日本語の主文現象からの提言』(代表研究者 長谷川信子), 303-316./長谷部郁子 (2012)「日本語における「擬態語+つく」タイプの動詞の形成について」第144回日本言語学会における口頭発表(於東京外国語大学)/長谷部郁子・神谷昇 (2010)「「-方」表現の形成について」*Scientific Approaches to Language* 9, 25-47./松本曜 (2009)「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」由本陽子・岸本秀樹編『語彙の意味と文法』175-194./由本陽子 (2001)「複雑述語」『動詞の意味と構文』269-296./由本陽子 (2005)『複合動詞・派生動詞の意味統語』ひつじ書房/由本陽子・影山太郎 (2009)「名詞を含む複合形容詞」『形容詞・副詞の意味と構文』, 223-257. 大修館書店.

# 参考文献(続き)

- Borer, H. (1994) "The projection of arguments," In *Functional projections: University of Massachusetts occasional papers 17*, eds. E. Benedicto and J. Runner, 19–48. GLSA./ Bowers, J. (1993) "The Syntax of Predication," *Linguistic Inquiry* 24, 591-656. /Fukuda, S. (印刷中) 'Aspectual Verbs as Functional Heads: Evidence from Japanese Aspectual Verbs' *NLLT* 30., ([http://www2.hawaii.edu/~fukudash/aspectual verbs as functional heads.pdf](http://www2.hawaii.edu/~fukudash/aspectual%20verbs%20as%20functional%20heads.pdf))/ Grimshaw, J. (1999) *Words and structure*. CSLI./ Hasebe, I. (2004) "Over- + V in English and Compound Verbs in Japanese" , *English Linguistics* 21-1, 1-33./Hasebe, I. (2007) *On the formation of complex predicates and the modularity of morphology* 博士論文(東京都立大学)/Kageyama, T. (2001) "Polymorphism and Boundedness in Event/Entity Nominalization," *Journal of Japanese Linguistics* 17, 29-57. /Tenny, C. (1989) "The Aspectual Interface Hypothesis," *Lexicon Project of Working Papers* 31, MIT press./Tenny, C. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Kluwer.